

Contents

- 本学所蔵奥平コレクションについて
——死蔵されていた藩札類の全貌に迫る—— 経済学部 教授 岩橋 勝・・・P2
- 私が薦めるこの一冊 経営学部 助教授 上杉志朗・・・P6
法学部 教授 廣澤孝之・・・P7
- 第66回(2005年度)私立大学図書館協会総会・研究大会・・・P8



奥平コレクション

本学所蔵奥平コレクションについて ——死蔵されていた藩札類の全貌に迫る——

経済学部 教授 岩橋 勝

はじめに——その分類整理を始めた契機

本学図書館にかなりまとまった量の藩札類が収蔵されていることは、本学で学会等が開催される際に他の稀覯図書とともに展示されることがあり、けっして知らないわけではなかった。しかし、全体としてどのような種類のものでどれくらいあるのか、また本学所蔵のものがどの程度の価値があるものかについては明らかにされないで、展示されていたようである。

わが国における藩札研究の第一人者は作道洋太郎大阪大学名誉教授である。作道教授は私の兄弟子筋にあたる。本学の前身・松山経済専門学校を卒業され、九州帝大を出られた後、母校・松山経專教授を2年ほど勤められた。この間に道後南町の奥平さんという藩札コレクターに出入りされて、藩札の魅力に強く引きずり込まれたという。先生自身もその収集のかたわら、藩札流通の経済史的研究を宇和島藩の事例を皮切りに始められ、わずか10年ほどでこの分野の古典的研究成果とみなされている『日本貨幣金融史の研究』(未来社、1961)にまとめられた。

およそ藩札研究には二通りの方法があり、その一つは古銭学的研究とでも言うようなものである。その額面や発行時期、図柄、紙質、および印判等について、いわば形態的に研究される。収集家間の取引相場に影響することもあり、こちらの研究は戦前からさかんで、戦後まとめられた荒木豊三郎編『日本古紙幣類鑑』(増訂版、全3巻、1972)『藩札上・下』『お札(私札)』(1966-69)が代表的な著作である。もう一つは経済史的研究であり、藩札が発行される背景や、

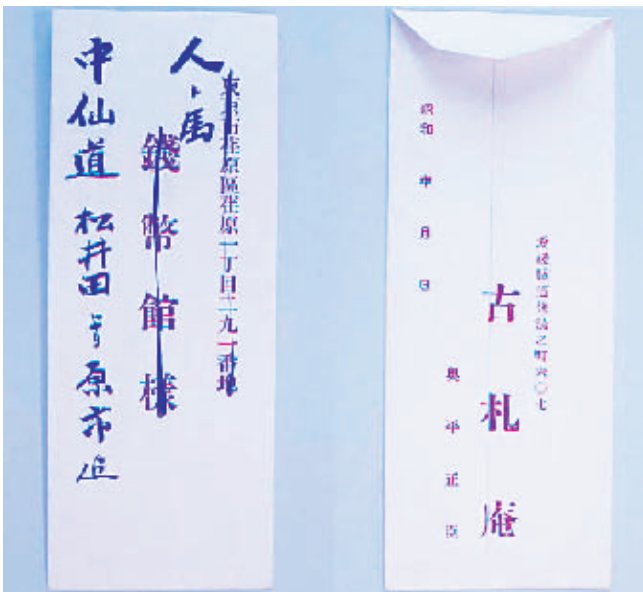
流通による経済的影響を分析する。そのためには貨幣種別や発行量等をできるだけ網羅的に知る必要があり、1975年に日本銀行の要請で日本貨幣協会によってまとめられた「古紙幣一覧」(『図録日本の貨幣』6に収載)が今日もっとも信頼できる資料となっている。

このように私の専攻分野である、藩札も含む江戸時代貨幣史研究にとって、現物の個々の藩札を観察することは必ずしも必要でないことと、奥平コレクションについては必要な際にいつでも作道先生にお聞きすればわかるという安心感から、本学赴任以来まったく確認する機会を持たないでいた。その作道先生が本年2月に急逝されてしまったのである。偶然、本学で8月に開催される私立大学図書館協会の全国大会で講演することになり、ならばこの際、本学図書館のPRもかねて奥平コレクションの全貌に迫ってみようと、収蔵藩札類の整理に着手したのである。いわば永年、本学に奉職しながらやるべくして放置していたのではないかという自省の念にかられての作業でもある。なお、整理作業にあたっては本学大学院博士後期課程・李紅梅さんの助力を得たことを明記しておきたい。

1 奥平コレクションと本学への受け入れ経緯

奥平コレクションとは、後述するように奥平氏が収集した藩札類を意味するが、どのような経緯でそれが本学の図書館に収蔵されることになったのかについては、まったく記録がなく、当然、本学の図書館関係者もはるか昔のことでご存じない。わずかにコレクションの中に混じって「愛媛県道後湯之町607古札庵・奥平正臣」と差出人名が印刷された封筒があり、その表側も「東京市荏原区荏原一丁目291番地 銭幣館様」と、あきらかに戦前の地名とわかる宛名が印刷されてあって、ひんぱんに郵便が発送されていたことがわかる。「銭幣館」とは「田中銭幣館」ともいわれ、皮革を中心とした軍需産業で財をなした田中啓文という古銭収集家が戦前にいて、東洋一の規模の古銭を集めたといわれる。このコレクションは現在、日本銀行貨幣博物館収蔵品の中核となっている。戦前において相当な古銭ブームがあり、収集家の間でネットワークが形成されてやりとりがなされ、奥平氏もその一人だったことになる。

ところで、奥平コレクションの藩札類はすべて「奥平貞臣」という名前が押印された専用の台紙に数点ずつ糸で固定して整理してある。なぜ「正臣」でなく「貞臣」なのか。この間の事情は最近翻刻された、伊予史談会創設者のひとり、西園寺源透氏の日記「富水日記抄 式」昭和12年6月6日の記事に「奥平正臣に藩札ヲウル、代十円ナリ」とあり、翌7月2日には「奥平正臣貞臣来ル、上分札ヲクレル」とあって、奥平氏がたしかに藩札を収集したり、求め



戦前期使用の奥平氏封筒
(氏による整理過程でメモ代わりに使用され、残存)

に応じて頒けたりすることもあったことがわかる（なお、ここでの「上分札」とは、川之江・上分地方で発行された私札）。その後、同年10月28日「奥平正臣方へ仏事二行ク」、同12月8日「奥平貞臣（伍長）葬儀二列ス、道後町葬ナリ」とあるので、貞臣氏が正臣氏の父君であり、昭和12年10月に亡くなられて、以降の藩札収集を正臣氏が継承して続けられたように見える。作道教授が戦後、松山で藩札交流されたのも正臣氏であった。ところが、かねて鶴見大学図書館長の高田信敬氏より教示を受けていた奥平氏による「藩札収集日記」連載が収録されているという『ポナンザ』誌（古銭札収集家専門誌）が最近、作道教授夫人より本学図書館に寄贈された。早速その記事を検索したところ、第6巻第5号（昭和45年5月号）で貞臣氏が満州の戦地において戦死された旨の記事が確認できた。同日記によれば、貞臣氏は父・正臣氏に同道して藩札収集を始め、家業を継承しようとしていた矢先であり、さきの「台紙」は出征前に作成されたものと思われる。

さきの印刷された封筒から、奥平氏が戦前は道後に在住していたことは明らかだが、戦後は昭和20年代後半頃三和銀行の囑託をされ、埼玉へ移住されたようである。このため、現在道後関係者に問い合わせても同氏を知る方はほとんどいない。ところが、作道教授夫人は本学2代目学長・星野通先生の姪にあられる方であるが、同夫人のお話では奥平コレクションの多くは昭和28年春、三和銀行に譲渡されたが、その他のものとその後さらに収集されたものが星野学長の仲介で本学に引き取られたものではないかという。蔵書としての「購入」ならば本学図書館で記録が残り、「目録」が作成されるはずだが、搬入時期すら判明しない。ちなみに、本学図書館の「西園寺文庫」は先述の西園寺源透蔵書で、清良記はじめ伊予地方の貴重な古文書の写本を含んでいるが、昭和20年5月に本学に寄贈された。搬入時、35箱に入れられた数千点の図書・資料があって、本学は「金一封(300円)」を渡した記録がある（熊谷正文編『西園寺源透——その生涯と学績』2004）。奥平コレクションも同様な方式で本学に受け入れられたものとみられる。西園寺文庫は1956年に図書館の手で目録が作成され

たが、藩札類は目録化が一般図書としてなじまず、複雑なため、今日まで「放置」されたのであろう。

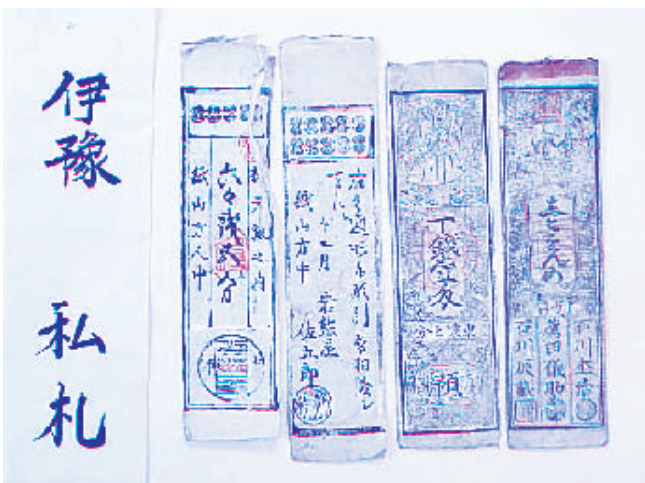
2 藩札とはなにか

藩札とは、一般に江戸期諸大名領で発行された正貨に代わる紙幣をいう。しかし、流通範囲はより狭いが、旗本・御家人や代官支配地、さらには社寺領で発行されたものもその性格がほぼ同一であることから「藩札」に含まれることが多い。藩当局が直接業務に当たることもあるが、大半は領内の財力ある商人や両替商が委託され、発行・引き替えに当たったので、その兌換信用力を高めた。また、宿場や鉱山、町村という、より地域の限定された範囲で民間の有力者が発行して流通した「私札」も、明治以降に統合される政府紙幣や銀行券の前身として同時に論じられる場合も多い。

藩札発行の第1号は、1661年に越前福井藩で発行されたものと永くみなされてきたが、近年、1630年に備後福山藩が銀札・銭札を発行したことが認定され、さらに初発年が早くなった。私札では大坂市中やその周辺で1610年代まで遡って流通していたことが確認できるほか、伊勢地方では山田・宇治を中心に17世紀初頭以降、大量の羽書（札）が流通していた。これらはいずれも日常生活に必要な小額貨幣が不足していたことから、自然発生的に用途を限定して発行されたものと思われる。そうした庶民の貨幣需要に便乗して、諸藩が一時的に財政難を乗り切ろうと図ったのが藩札発行であった。ただし、18世紀中期までは発行藩はさほど多くなく、増加するのは18世紀後期、とりわけ19世紀に入ってからである。藩札が明治政府によって整理・回収のため調査が行われた1871年までに、全藩数の約8割にあたる244藩が発行したといわれる。

藩札の発行分布を見ると、だんぜん西日本が多い。これは西日本のほうがより貨幣経済が進んでいたためともいえるが、基本的に金遣いの東日本では小額の日常取引で当初より銭貨を使用していて、銭貨がほどよく供給される限り、庶民の藩札需要はさほど高くなかった。銀遣いの西日本では小額取引でも銀建てでやり取りするのに授受できる一定額以下の小額銀貨はないので、代用貨幣としての銀札はその価値が保証される限りきわめて便利な存在だった。とくに18世紀後半以降に貨幣経済がより浸透してゆく西日本の郷町や農村部では銭遣いの地域が少なくなく、高額取引でも銭貨を使用することも多かったので、銀札を銭代わりの通貨として利用した。このため一見、銀札に見えながら、内実は銭札である「銭匁札」が多くの地域で流通していった。

藩札発行は幕府の認可を必要とするが、無届で発行する場合も多く、1842年に調査された際は金銀正貨流通高の3%にも満たなかったが、1869年に藩札の回収を前提として明治政府が調査した際には旧幕府正貨の15%を占めた。1871年以降、それぞれの札の流通価額評価がなされ、大半が政府紙幣と引き替えられた。



銭匁札の一例 伊予の私札(南予と東予で流通した「六々銭匁」札と「丁銭匁」上分札)

3 収蔵藩札の内容

奥平コレクションに含まれる藩札類は整理の結果、合計1,953枚であった。発行時期と額面が同一の札も若干含まれているので、種別としては1,700種ほどとなる。このうち狭義の藩札、すなわち大名領の札は940枚と一番多い。ついで民間が必要に応じて発行した私札が449枚と多く、その他は表示したように藩札に準じる旗本札や社寺札、さらには米切手類など、多種にわたっている。それらのうち、特色あるものを中心に以下、紹介しよう。

まず藩札は、北は秋田・仙台から、南は日向の佐土原・飢肥までほぼ全国にわたっている。地域別にみると、分布表のようにやはり地元・伊予のものが断然多く、松山・今治・西条・小松・大洲・新谷・宇和島・吉田の「八藩」すべてそろっており、あわせて179枚だった。愛媛県内で「八藩」藩札の現物をすべてそろえているのはおそらく本学のみであろう。ただし、中予・東予は意外に少なく、大洲・宇和島両藩が多い。松山藩札は17世紀中期までは札価が下落して、流通が頓挫することもあったが、同世紀後半以降は銀札であった藩札の価値が1匁=60文に固定化した実質、銭札化したあとは比較的順調に明治初年まで流通したので、19世紀の松山藩札がまったく残っていないのは問題が残る。別置されたまま、このコレクションに含まれなかった可能性がある。あるいは順調に流通したもののほど退蔵される機会が少なく、明治初年の政府による回収の際も大半、政府紙幣に引き換えられてしまったのかもしれない。

表1 奥平コレクションの構成 (枚)

藩札	940
旗本札	143
社寺札	63
私札	449
米切手類	133
明治期紙券	30
外国紙幣	33
商品札	98
富札	45
通札	19
計	1,953

表2 藩札の地域別構成 (枚)

伊予を含む四国諸藩	246
中国地方諸藩	173
九州地方諸藩	227
近畿地方諸藩	177
中部地方以北の諸藩	117
計	940

最も時期の遡れる札は、宇和島藩の元禄11(1698)年札である。支藩の吉田藩は独自の札発行をせず、宇和島札に「吉田」の加印をして通用させたが、その印判のある札が複数確認できる。

四国では他に高知、徳島、高松、丸亀の藩札が確認できるが、多度津藩札のみは含まれていない。同藩札は享保17年(1732)に一度だけ発行されたようだ。しかもこの時期には伊予を中心に西日本全般で虫害による飢饉が広がり、米価が高騰した。ために藩札の価値が下落し、大半の藩札が流通停止に追い込まれた。したがって、多度津藩札はほと

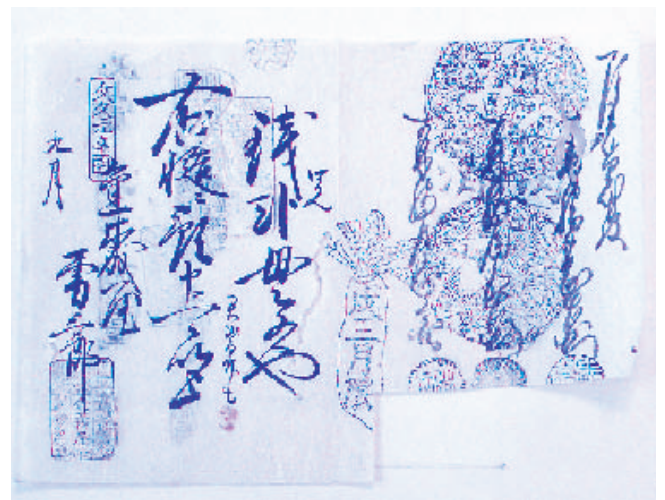
んど存在しないといってもよいわけで、奥平コレクションは四国についてはほとんどの藩札を含んでいることになる。ただし、天和元年(1681)以来、享保、元文、明治初年に少なくとも4度にわたり発行されていることが知られている徳島藩札は享保札が存するのみであるように、発行されたもののすべてがコレクションに含まれているわけではない。

四国以外の藩では、近畿・中国・九州の諸藩札ともおおむね含まれているとはいえ、舞鶴・豊岡・安志・山崎・岩国・府内・臼杵などの数万石以下の小藩のほか、姫路・鹿児島のような大藩の札は含まれていない。奥平コレクションのうち、より網羅的なものは三和銀行に譲渡され、残余のものが本学に搬入されたのではないかという推測をいっそう強めさせる。それにしてもこれら各地の藩札を見渡すと、時期的あるいは地域別のさまざまな特徴を持った札を観察することができる。

まず、幕府は宝永4年(1707)札遣い停止令を出し、以降、享保15年(1730)まで札流通は中断するが、この時期までに札を発行した藩は判明する限り46藩であった。奥平コレクションで宝永期までの年代がわかる札は、さきの宇和島藩のほかには鳥取(1676年)、平戸(1677年)、備



土佐藩の「八銭」札(左2枚)と、徳山藩札(右2枚)



松江藩の「連判札」



左から人足切手、駄賃預切手、釣銭預切手、鉄山賃銭切手

中庭瀬(1701年)の3藩のみである。また、萩(山口)藩の宝暦札に「安永」と「天保」の異なる年号の加印がなされたものが残存しているように、札の表面に印刷された年号が必ずしも発行年を示すのではなく、同じ図柄で印刷を重ねてゆく場合も少なくなかったのである。すなわち、札価が下落した場合、旧札を廃棄し、新札が出回る間のつなぎに年号や引き替え人の加印をし、代用札として流通させることがあった。

さらに、先にふれた「銭匁」を如実に示す札として、四国では高知藩の「八銭」(1匁=80文の換算)があったが、近畿(ただし丹後・播磨でのみ)、中国、九州では多く散見される。とくに80文銭勘定が行われていた徳山藩では、たとえば札表面に「現銭預四匁」とある札の裏面に「三百式拾文」(80文×4匁=320文)と記されてあって、たしかに銭1匁が80文であることが確認できる。また、明治5年以降に進められた藩札回収の際、個別の札に大蔵省による評価額が朱字で押印されたが、伊予松山のほか松江、佐土原両藩札でも確認できる。

特殊な藩札としては出雲松江藩の「連判札」がある。一見、ただの銭預り証文のように見えるが、裏面に大勢の裏書人が列記されており、転々流通したことがわかる。一般の札は厚紙で小型長方形だが、連判札は用紙も薄く、小さな証文そのものである。同藩ではたしかに藩札として用いられたようである。類似の様式は富山藩や熊本藩でもこのコレクションで見ることができる。

4 私札等の内容

地域の資力ある者が引き受け元になって、その信用で流通する札を「私札」と称しているが、本コレクションには合わせて449枚含まれている。その発行目的は多様であったが、「釣り銭」札や、宿駅および鉾山内通用として発行されたものが周辺にも出回ることが少なくなかったことから、小額貨幣不足が要因となっているとみられる。一時的な幕府正貨回収・流用を目的として、いわば財政的必要から発

行されることが少なくない「藩札」と大きく異なる一面である。紙質は藩札に比べるとやや薄めだが、形態は区別しがたいものが多い。ただし木版の図柄は単調で、むしろ手書きに印判を押しただけのものも少なくない。発行年を明記したものは藩札に比べるとはるかに少なく、明示された大半が幕末期、さかのぼってもせいぜい19世紀はじめであることから、18世紀発行の私札はきわめて限られていたと考えられる。

私札は一般に藩札が流通していない地域で出まわったと考えられやすいが、かならずしもそうではない。このことはたとえば、藩札も流通していた富山藩で、幕末期に少なからず城下町人発行の私札もそれ以上に出まわっていたし、姫路・明石藩など大小10藩と8つの旗本領などに加え、他国藩飛び地なども入り組んでいた播磨ではすべての領地で藩札・旗本札が発行され、流通していたにもかかわらず、私札も他国以上に多種流通していた。その種類を見ると、宿駅人足・駄賃切手をはじめ、釣り銭切手、鉄山内賃銭切手、米切手、木綿預切手、魚切手など、およそ私札のオンパレードをコレクションの中の播磨地域で見ることができる。播磨におけるこのような藩札・私札流通の活況振りは荒木豊三郎著『藩札』『お札』や、日銀編『図録日本の貨幣』、国立史料館編『江戸時代の紙幣』でも等しく確認されるものであり、奥平コレクションのみに偏在しているわけではない。

私札以外の収蔵品としては、まず旗本札が143枚あるが、今日知られている種数からすればさほど多くはない。社寺札もほとんどは畿内のもので、合わせて63枚にすぎない。旗本札とともに意識的に集められたもののように思えない。むしろ注目すべきは、伊予地方を中心とした商品札、富札、米切手・米手形類である。商品札では酒札が多く、酒の銘柄が明示され、その等級により札価が定められたようである。価額が併記された札は少ないが、わずかに知られるものを見ると、たとえば松山・八蔵屋の「長生」は1升につき357文であったが、風早北条の綿屋勘兵衛発行酒札は1升につき180銅(文)とほぼ半額であった。商品券として使用もされるが、銭札としても授受されたであろう。酒札のほかには、魚、寿司、煙草、饅頭、豆腐、菓子などの札があった。

また数は多くないが、明治期の南予地方銀行宛に振り出された小切手類も興味深い。いずれも明治30年から大正期にかけてのもので、宇和島、八幡浜、野村、大洲、内子での金融活動の一端をあきらかにしてくれる。以上はこのコレクションでしか見ることができないものを多く含んでおり、またこの方面の実証的研究もさほど進んでいないことから、今後おおいに貴重な史料として益することになると思われる。

私が薦めるこの一冊

経営学部 助教授 上杉 志朗



鋼鉄都市

アイザック・アシモフ (著)、
福島正実 (翻訳)

請求記号：933/As
配架場所：開架(3F)

昨年封切られた、ウィル・スミス主演のハリウッド映画「アイ, ロボット」を覚えている方も多いことでしょう。この本は、「アイ, ロボット」にインスパイアした作品「われはロボット」の著者アイザック・アシモフ博士が1953年に創作したSFです。SFってなんだ?と問われる方に念のために申し上げますと「Science Fiction=空想科学小説」の略語で、まだ実現していないテクノロジーの数々を駆使して、さも、本当らしくお話しが進むジャンルのひとつです。

アシモフが描く、「アイ, ロボット」の世界よりもはるか未来の地球は、宇宙に進出した人々の子孫からなる優等な「宇宙人」から、病原菌のかたまりと見なされる劣等の「地球人」が、鋼鉄のドームに覆われた人口過剰の「シティ」に集住しています。厳密な階級に分けられて。コミュニティ・キッチンや共同浴場のある集合住宅も、イースト工場で合成された食事の献立すらも、職業と連動した階級ごとに厳格に決められています。ところが、やっと勝ち得た職業も「R」と俗称される「ロボット」にいつ取って代わられて、降格の憂き目にあうかもしれない、そんな不安に満ちた世界。

この未来社会で、ある日突然、想像だになかった、支配者「宇宙人」の殺人事件がおこり、地球人の私服刑事イライジャ・ベイリが、宇宙人の世界から派遣されたR・ダニール・オリヴォーと協力して事件を解決していきます。ストーリーは、アシモフが描く未来社会での謎解きと、スリルとサスペンスの連続で展開していきます。

アシモフは、SFにミステリの要素を持ち込んだ先駆者で、次から次へと展開する謎解きと壮大な架空の舞台が身上の作家です。同時に、彼は「ロボットは人間に危害を加えることはできない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼすことはできない」からはじまる「ロボット工学三原則」の生みの親でもあります。この三原則は、いまやロボットの登場するお話しでは大前提として踏襲されているほどのものです。このような原則を生み出したのもさることながら、アシモフの作品は非常に理路整然としています。本当は彼の空想の世界に過ぎないはずなのに、ある前提条件（たとえば、三原則）をおいて、その下で仮説を立て、検証するように理論を展開していく、その話の展開にいつの間にか、彼の掌の上で推理の森を右往左往とさせられている自分にはっとします。

それもそのはず、アシモフは、生化学の博士号を持っており、ボストン大学の生化学の教授とSF作家との二足のわらじを履いていて、研究領域においてもSF作品と並ぶ多数の業績を残しているのです。彼が描くSFが論理的でかつ分析的なのは、彼の空想が科学的思考として生み出されているからなのでしょう。「ロボット」が遍在する社会を空想することは、彼にとっては、論理的な帰結として起こりえる未来を描くことだったのではないのでしょうか。

アシモフ博士は、惜しくも1997年にこの世を去りましたが、「ロボットと人間」について描くシリーズとは別に、「人間の帝国」の超未来史を描く「ファウンデーション」(化粧品ではないですよ)シリーズを著し、そこでは、人間とロボットの未来を見通した、あっと驚く大団円が用意されています。私たちは、彼が半世紀前に描いた未来社会の入り口に、今、まさに生きていますが、これらのシリーズが示してくれる未来図に学ぶところが大きいです。「鋼鉄都市」はそのはじめの一歩としてお奨めの一冊です。



公益のための グローバル化

カムラン・モフィッド著

請求記号：331/M476/1

配架場所：開架(2F)

著者のカムラン・モフィッド氏は、イランのテヘラン生まれ。イギリスとカナダの大学で経済学に関する学位を習得した後、現在は各地の大学で国際ビジネスや中東の政治経済などについて教授している。グローバル化に関する国際ワークショップなどで目覚ましい活躍をしている経済学者である。

20世紀末以来、グローバル化した資本主義に対する対応は、現在のところ大きく二つに分かれているようである。一つは、国際的な経済競争に打ち勝つため、不採算部門の縮小や雇用などに関する規制緩和によって国民経済の構造転換をはかる動きである。現在のいわゆる小泉構造改革も基本的にはこの路線といえるだろう。こうした動きに対しては、経済格差の拡大や社会的弱者の切り捨てにつながるという反対運動が、WTO開催時に激しく展開され注目を集めているように「反グローバリズム」の運動として国際的にも展開されている。これに対して二つ目の対応は、経済的なグローバル化は容認しつつも、それが国家や民族の文化的アイデンティティを危うくする傾向を批判し、外国人の排斥など文化的純化主義をはかっているという動きである。ヨーロッパ各国における極右政党の台頭や、日本における石原東京都知事の異常な人気の高さに示されているような排外的なナショナリズムの亢進にその姿を見ることができるだろう。

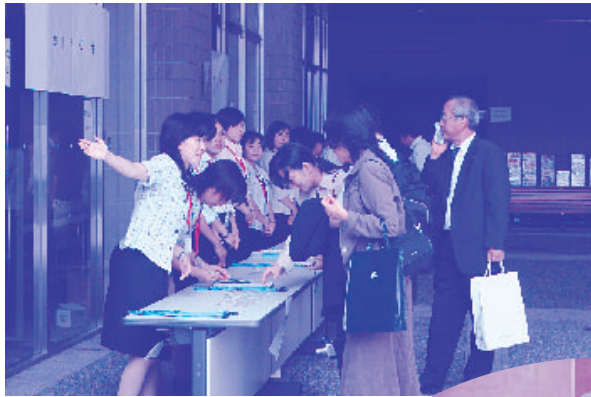
しかし、著者がここで目指そうとしているグローバリズムに対する方向は、生産の拡大や人間の欲望の実現に奉仕することを主要な命題としてきた現在主流となっている経済学の考え方を根底から再検討

しようとするものである。それは、地球的規模の社会経済的危機に対する解決策を、道徳、倫理、信仰といった人間的価値を包含するような新鮮な視点から眺めることにつながっている。著者の主張のうちとくに重要な点は、第一に、グローバルな資本主義が達成したと主張する「自由な世界」は、きわめて限定的な見方にすぎず、倫理や宗教に基礎を置く代替的な世界観ではまったく異なって評価されるように、世界を理解し評価する方法は決して一つであってはならないという点。第二は、今日起こっている深刻な社会経済問題は、それに対処する新しい「連帯」の態度が作られなければ解決しないことを強調している点。第三は、現代社会の不正と地球的規模の環境破壊は絡み合っており、それらは一緒に克服されなければならないとする点、である。こうした視点はいずれも、生命の価値を知り、それを豊かなものとする組織的な努力としての倫理や宗教と経済活動とを再び結びつけようとするものに他ならない。

著者は、多くの宗教団体を含む国際的シンポジウムの開催に関与し、「私たちが自分自身とは何かに気づき、自己のアイデンティティを確認するのは、他者のみだからである」と述べて、異なった宗教や文化の間での対話の必要性を強調する。そして「私たちの子どもに未来を望むなら、私たち自身が無気力とエゴイズムを克服し、未来の生きた希望となるよう生まれ変わらなければならない」と述べて、私たち自身に覚醒を求めている。

カトリックとイスラームの社会教説を基盤として、「公益」や「連帯」に関する諸原理の再構築をはかろうとする著者の視点にはいくつかの留保が必要ではあろう。しかし、近年の日本におけるフェティシズム（物神崇拜）ともいえるブランド品信仰を見るにつけ、「ブランドとは排他性の別名であり、ブランドは中に取り込むのと同じ数だけ外へも締め出す」とする現代社会に対する著者のたしかな視点から私たちが学ぶものは多いだろう。

第66回(2005年度)私立大学図書館協会総会・研究大会が本学で、 2005年8月25日～26日開催されました。



「編集後記」

今回は、「奥平コレクション」について、経済学部、岩橋 勝教授の研究を掲載することが出来ました。本学において、2005（平成17）年8月に「第66回私立大学図書館協会総会・研究大会」で講演していただいたものをまとめていただきました。

日本最北の動物園の起死回生劇を描いた『旭山動物園の奇跡』（扶桑社）には、「動物園冬の時代」とのフ

レーズがあり、「大学冬の時代」と言われて久しい身には、他人事ではない思いがしました。旭山動物園の成功には、「動物園はこうありたい」と思う飼育係の集団、結局は「人」だったように、図書館も「人」だと思いました。「図書館冬の時代」にしないために、図書館員の「松山大学図書館はこうありたい」との思いを一貫したいものです。

松山大学図書館報 No.36 2005年12月31日発行

編集・発行 松山大学図書館

〒790-8578 松山市文京町4番地2 TEL(089)925-7111(代)

ホームページアドレス <http://www.matsuyama-u.ac.jp>

E-mail: mu-libs@matsuyama-u.jp